

函館紀行 — 新島 襄渡航の碑 —

窪 田 昌 三

思い立って、夫婦で北海道に小旅行した。空港から直行したのは、函館の観光スポット、ベイエリア地区、即ち函館開港に伴う明治時代のレンガ倉庫が立ち並んでいる区域である。ところがこちらには並みの観光客ではない。賑わうそこを一目散に素通りして、港の先へと足を急がせる。目指すのは、新島先生が国禁を侵して日本を脱出した場所である。通りすがりの地元の人に教えられた通りに本通りを折れると、倉庫の間の狭い通路の先の海岸に、「新島 襄渡航の碑」がひっそりと、しかし凜として建っていた。

この場所を訪れた翔友は多いと思うが、私にとって、何時かは果たさなければならぬと思いつけてきた宿題のようなものであった。「やっと今、私は142年前に新島先生が立っていた場所に立ち、先生が見た風景を見ているのだ」と実感した時、抑えようも無い感懐が次々に湧き上がってきた。

背後に函館山が迫り、先生が司祭に日本語を教えに通ったハリスト正教会の美しい姿が指呼の間に見えていたであろう。右方向には、開港後5年を経過して大小の船で賑わう函館港と、開拓間もない家並みが続いていたはずである。

1864年(元治元年)6月14日午後11時頃、折からの夜陰に紛れて、福士卯之助が漕ぐ小船に潜み、沖に停泊している米船ベルリン号に向かってこの岸を離れた時、若干21歳の新島青年の胸に去来した事はどのようなものであったのだろうか。

幕府の屋台骨が揺らいできた時代とは云え、幕藩体制に組み込まれた窮屈な武家である以上、鎖

国の禁を破れば、本人は元よりそれに繋がる人達にも相当なお咎めがあることは百も承知していたはずである。成功したとしても、その先に待っている異国での生活、数え上げれば切が無い不安との葛藤。しかし、それらに打ち勝って余りある学問と西洋知識吸収への熱情の高まりが若き新島襄を壮途に駆り立てたのではなかっただろうか。

「函館に行く」と云って江戸から快風丸で出発する前夜、家族だけの送別の宴で詠んだとされる、「武士(もののふ)の 思い立田の山紅葉 錦着ざれば など帰るべき」この三十一文字に、その覚悟のほどをみる事が出来る。それに対して祖父弁治が、

「行けるなら 行って来て見よ 花の山」という一句を贈って孫の門出を励ましている。これからして、新島家では、「この子が目指そうとしている先は、函館ではなく、ひょっとすると二度と生きて相まみえることのない所、一異国一ではないだろうか?」と気付

いていたように思う。それでも、それ以上のことを問わずに送り出そうと決めた家族の、本人にも劣らない覚悟を偉大だと思う。そして開いた別れの宴、その様子が目に見えるようである。

次々に心に浮かぶ感懐に時の過ぎるのを忘れ、「ねえ、そろそろ行きませんか?」と云う家内の声で現実に引き戻された。

この地、この海岸こそが同志社の原点であると確信出来た旅であった。

